HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	高等教育研究についての11の考察
Author(s)	マーチン, トロー
Citation	高等教育ジャーナル, 5, 137-139
Issue Date	1999
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.5.137
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29769
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_P137-139.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

高等教育研究についての11の考察

マーチン・トロー＊
カリフォルニア大学バークレー校大学院公共政策学研究科

Eleven Thoughts on Research in Higher Education

Martin Trow＊
Graduate School of Public Policy, University of California, Berkeley

（翻訳版）

1. 研究の精神

研究とは物事を意図的にかつ組織的に見つけだそうとする努力のことです。これは自然科学や生命科学におけると同様に教育においても真実です。異なる専門においては研究で使われる方法は異なりますが，その精神は同じであって知識の総体を増加させるということです。教育の領域ではしばしば，それは漠然とは知られているけれども明白には理解されていないことがらを明らかにすることを意味します。例えば，私たちは動機づけが教育においては決定的な要因であることを知っていますが，何が学生に動機づけをもたらすか，あるいは，いかにすれば動機づけを強めたり持続させたりできるかということについてはあまり知りません。それが研究の目的ともなります。

2. 研究の手段

a. 高等教育の研究者はたいていの他の分野の研究者や学者よりも有利です。私たち自身が私たちの研究していることがらの一部分であり，私たちはその性質やプロセスを理解しようとしている機関に雇われていて，私たちは自身で自らの探究の核心である教育と学習に不断に携わっているからです。それ故に，私たちの第一のそして最善の道具は，私たち自身です。すなわち，私たちが教師，研究者，管理者，同僚，学生として経験することがらを聞いて，見て，問いかける私たち自身の能力です。

b. 私たちは誰でも，他者に問いかけることによって高等教育の機関およびプロセスについて如何に多く学べるかを知っています。しかし，高等教育についての知識の最善の情報源が教師と学習者としての私たち自身の経験であるならば，それを取り出し調べ，学生として教師としての活動についての私たち自身の記憶の大きな意味を探らなければ，知識は洞窟におかれた壺の中の巻物でもあるかのように使われずにそのまま残ってしまうでしょう。

c. 教育研究における最強の道具は，教育現場で何が進行しているかを見たり聞いたりする研究者の目と耳であり，そして観察者として見て聞いていることがらについていだく疑問とアイデアに満ちた精神です。そのような観察者は，見聞きしていることがらの意味に関連する多くの魅力的な仮説を携えて現場におもむき，彼の前にある証拠に照らし合わせてそれらの仮説を不断に検証し，磨きをかけます。

3. 文献と経験

高等教育の研究者には，私たち自身の経験に密着することと，その限界を超越することの双方が必要です。正式な訓練と教育についての文献からの広範

*) Correspondence : Graduate School of Public Policy, University of California, 2607 Hearst Avenue #7320, Berkeley, California 94720-7320

な学識は，私たちが研究に持ち込む疑問とアイデアの持ち駒を増やし，私たちの知識をして私たち自身の経験を凌駕せしめることができます。しかしそこから派生する知識は，学生，教師，管理者としての私たち自身の経験によって試されるときにはじめて，大きな価値をもちます。

4. 研究と学位

どのレベルにおいても教育について研究するには高度の学位は必要ではありません。実際，そのような学位をとることは，教育研究の正統的な方法を教え込まれるという点で，ときにはハンディキャップとなります。というのは，現在の教育研究の正統的な方法は，科学と学問の世界において教育学の分野の地位を高めるという目的のために，自然科学者たちの方法を真似ているからです。教育学における正式な訓練は，研究者の見方を広くし，自分自身のものを越える経験や，自分自身では思いつかないかもしれない様々な論点や疑問に触れさせるという点で役に立ちます。しかし，いつもそうとは限りません。

5. さまざまなレベル

エリート段階から，マス段階，ユニバーサル段階への過去半世紀にわたる移行のような，高等教育における広大な国際的発展の研究から，教室内での教授法や教育と学習のプロセスのようなレベルに降りてくると，研究方法は変わります。各レベルでの状態は他のレベルで私たちが見る状態に影響するということに気付く必要があります。それらはダイナミックに関連しています。明らかな例を挙げましょう。大学での教育の性格とおそらく質は，その大学における教師と学生の比率に影響されます。しかし，その比率は今度は政府あるいは市場によって定められた大学の予算によって決定されるのです。

6. 見せかけの研究

すべての教育研究の非常に大きい部分，おそらくその大半は，著者がすでに真であると信じていること，あるいは真であってほしいと望んでいることを証明するために実行されています。それは本当の意味での研究ではなくて，研究を装ってはいますが，単にある論争に役立っているに過ぎません。例えば，アメリカにおけるクラスサイズの教育効果におよぼす影響の研究の多くはこの性格をもっていて，実際それは経験的な証拠をほとんど採り入れていません。

7. 良い研究の敵

良い教育研究をするためにもっとも避けなければいけないのは，研究を始めるよりまえに，教育でなされるべきことを予想し，そこに存在するに違いない，あるいは存在してほしいとすでに考えているものを見つけようとする傾向です。教育政策に対する教育研究の影響力が弱いのは，おおむねこの事実に由来します。実際，政策立案者はしばしば教育研究は単に見せかけだけの偏った議論であるとみなしてそれを無視します。

8. 反証

教育におけると同じように，反証は，すなわち私たちの現在の理解または好みに反する証拠は，知識に重要な進展をもたらす源です。私たちが反証をどのように扱うかは，そもそもそれを集めることにするかどうかも含めて，研究者として多分もっとも重要な判断です。それは科学の面と倫理の面の双方に関する判断です。当然ながら，それは私たちの発見の質と信頼性の双方に影響します。

9. もうひとつの敵

既定のものを見つけようとする傾向の次に，教育に関する良い仕事をするためにもっとも避けなければいけないことは臆病ということです。教育の研究においては，学生も研究者も等しくすでに分かっているという合意ができている事柄を，すなわちこの分野の既存の知識体系を，問題にすることをしばしば恐れます。大胆に行うことは間違うという危険をおかすことになり，それを臆病な研究者は恐れるのです。しかし，アインシュタインがかつて言ったように，「間違う危険をおかさなくては，重要な何事においても真実は得られません。」

10.「例えば」とはじめること

「例えば，とはじめることは証明ではない」と言われてきました。しかし「例えば」とはじめることはアイデアあるいは仮説と関連する証拠をもたらすための出発点です。そしてそれは，不変な相互関係を証明することが不可能で，つねに文脈を指定して確率のことばで相互関係を述べる分野では，そんなに悪い出発点ではありません。しかしながら，「例えば」とはじめるのが良い出発点であったとしても，それは単なる出発点でしかありません。

11. 最初のステップ

いくつかの社会科学の名前は，すなわち心理学，社会心理学，人類学，社会学，経済学，歴史学，政治学は，学科とか大学院での専攻をあらわすのに便利な名前です。しかし生き物である現実は，そして大学の現実は，学科や専攻のそれぞれの観点からは決して窺えません。教室で，あるいは教師と学生の間で起こっていることを理解するには，教育と学習のあらゆる面についての理解が必要です。教育学の研究者の第一の課題は，原理的には彼または彼女は教育の論点や疑問に関連する自分自身の経験とともに，社会科学のすべての観点をもつことが可能でなければならないということを認識することです。それは生涯の課題です。最初のステップは，研究者が学位をとった分野を越えることであり，少なくともうひとつの異なる分野の土俵で考え始めることです。この最初のステップがもっとも難しいのです。

（翻訳：西森 敏之）